ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（二）

曽　田　長　人

はじめに

本論は、ドイツ第三帝国（以下、第三帝国と略）におけるスパルタの受容の諸相を実証的に検討する。そしてそれを踏まえた上で、同帝国におけるスパルタ崇拝の高まりがどのようにして起きたのか、思想史的に跡付けることを目的とする。論文全体の前半、すなわち第一章「スパルタについて」、第二章「ナチズムの世界観・施策とスパルタ」に関しては、「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（一）」[1)]（以下「スパルタ受容（一）」と略）において取り上げた。論文全体の後半に当たる本論においては、第三章「第二次世界大戦中のスパルタ受容」、第四章「第三帝国のスパルタ崇拝に対する国外での賛否」、第五章「第三帝国のスパルタ崇拝に対する国内での批判」について検討を行う。

第三章　第二次世界大戦中のスパルタ受容

第二章の１.農業政策、２.教育政策、３.人種政策、４.占領政策において触れたように、1930年代の第三帝国においてはスパルタの積極的な受容と並行して、スパルタに対する関心の高まりが見られた。これを背景として独ソ戦でドイツが劣勢に立たされた後、スパルタはしばしば戦意高揚のため公の場または関係者の間で引用されるに至る。それは主に第一章の４で触れた、スパルタの文学に詠われた軍事面での活躍を当てこすったものである。以下、その諸相を検討してゆきたい。

1942年11月、スターリングラードでソ連軍と死闘を繰り広げていたドイツ国防軍第六軍は、ソ連軍に包囲される。空輸による補給は軍を維持するための必要量に足りず、包囲網は縮められ、飛行場も奪取され、1943年１月末には降伏するか全滅するかという苦境に追い込まれる。そういった中でドイツ帝国元帥にしてドイツ空軍総司令官ヘルマン・ゲーリング（Hermann Göring）は、ヒトラー

１）曽田長人「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（一）」（『経済論集』東洋大学経済学部、第43巻第２号、2018年）pp.199-224.

の帝国宰相任命10周年を記念して１月30日、ドイツ国防軍の高官を前にラジオ演説を行った。この演説の中で彼は、スターリングラードで包囲されたドイツ国防軍第六軍を、テルモピュライにおけるかつてのスパルタ兵に、次のように譬えた。

「我が兵士よ。諸君の多くはヨーロッパの偉大で強力な歴史の中から、（第六軍が置かれた状況と）似た例を聞いたことがあるだろう。数は小さくとも、結局のところ行為それ自体に違いはない。何千年も前のことを考えてみるがよい。当時ギリシアの狭隘な（テルモピュライの）通過路に、レオニダスという並外れて勇敢で大胆な男がいた。彼は、その勇敢さと大胆さで名高かった種族から、300名のスパルタ市民を配下として従えていた。（ペルシア軍という）圧倒的な多数が、この小さな群れへ攻撃を繰り返した。空は、発射された多くの矢で暗くなった。当時も、ここ北方人[2]のところで（アジアから）殺到した群れが阻止された。（中略）（ペルシア王の）クセルクセス（１世）には、途方もない数の戦士が用意されていた。しかし（スパルタの）300名の男たちは、堅忍不抜であった。彼らは勝つ見込みのない戦いを、最後まで戦い抜いた。勝つ見込みはなかったが、意義がなかったわけではない。ついに最後の男が戦死した。この狭隘な通過路に、次のような（シモニデスの）戦死者碑銘が残されている。“旅人ヨ、スパルタノ地ニ赴カバ、彼ノ地ノ人ニ告ゲ知ラセヨ、我ラ国法ニ従ヒ、ココニ倒レ伏スヲ、汝ハ見タリ、ト”。我が同志よ、300名の男たちがいた。何千年もが経過した――そして今日、（スターリングラードにおける）あの戦いとあの犠牲は、並外れて英雄的で、兵士としてのあり方の最高の範例と見なされている。いつか次のように言うことになるだろう。“ドイツノ地ニ赴カバ、彼ノ地ノ人ニ告ゲ知ラセヨ、我ラ（ドイツ兵は－以下、引用文内のかっこは、原則として引用者による）国法、我々ノ民族ノ安全ノタメノ法ニ従ヒ、スターリングラードニ倒レ伏スヲ、汝ハ見タリ、ト。” 諸君の誰もがこの法、つまり祖国ドイツのために死ぬという法を胸中に抱いている。なぜならドイツが生きることこそ、あらゆる法の希望だからだ。」[3]

かつてテルモピュライの戦いにおいては、スパルタ兵がギリシアを守るために玉砕した。これに倣い、スターリングラードの戦いでドイツ国防軍第六軍がドイツを守るため犠牲の死を遂げるよう、

２）同上、pp.206-207を参照。

３）Krüger, Peter: Etzels Halle und Stalingrad. Die Rede Görings vom 30. 1. 1943, in: Die Nibelungen. Sage - Epos - Mythos, hrsg.v.Joachim Heinzle, Klaus Klein und Ute Obhof, Wiesbaden 2003, S.396f..この演説には様々な版があるが、訳文は実際に放送されたラジオ演説をテープ起こしした版に基づく。ゲーリングの演説はナチ党の機関誌「フェルキッシャー・ベオバハターVölkischer Beobachter」1943年２月２日号にも掲載され、ドイツ国民の広く知るところとなった。

ゲーリングは呼びかけた。「祖国ドイツのために死ぬ」ことが、最高の価値として称揚されたのである。この呼びかけの裏には、以下のようなメッセージが込められていた。すなわちテルモピュライの戦いでのスパルタ兵の玉砕は、ペルシア軍に対する徹底抗戦の意志をギリシア連合軍に固めさせ、これが後のギリシア連合軍のペルシア軍に対する勝利に繋がった。これと同様、ドイツ国防軍第六軍が降伏を拒否し全滅することが、ドイツのソ連に対する勝利をいずれ導くべきであると[4)]。

上のゲーリングの演説にもかかわらず、1943年２月２日スターリングラードのドイツ国防軍第六軍は降伏する。この演説は「スパルタ受容（一）」で取り上げた[5)]、アドルフ・ヒトラー学校における教科書『スパルタ　北方の支配層による生をめぐる戦い』の第二版（1943年）に収録された[6)]。民族共同体教育施設においても、ゲーリングの演説のみならず「テルモピュライ戦死者碑銘」とテュルタイオスの「エレゲイアー」は、戦争が長引くにつれてますます多く引用されるようになったことが証言されている[7)]。こうして戦争の激化につれて、ナチ色の濃い二つの学校において

４）ゲーリングの演説は、スターリングラード包囲網の中にいたドイツ国防軍第六軍の兵士によってもラジオの生放送を通して聞かれていた。この放送を聞いた一将校はゲーリングの期待とは裏腹に、その時の様子を次のように振り返っている。「ヒステリックな壮麗化と称賛が連ねられ、決まり文句と嘘がぎっしり詰め込まれたこの（ゲーリングの）演説が続くにつれて、深い酔いから醒め怒った（第六軍の兵士という）聴衆の敵意は嵩じた。周囲の眼差し、態度、言葉の中には、激しい憤怒が心の中から沸き上がったことが紛れもなく示されていた。（中略）おそらく（その場に居合わせた）全ての人は、自分たちの追悼演説を余りにも早く聞いてしまった、と感じた。（中略）（ゲーリングによる）我々の（第六）軍の苦しみに満ちた死をひどく誉めそやすこと、人間性に基づくあらゆる法に抵触する状態を不誠実に英雄化することは、私を怒りで、いやそれどころか吐き気で満たした。（ゲーリングの）演説の間、言語に絶して苦しむ多くの何千人もの人々の死、混沌、断末魔の苦しみのぞっとするような一連の像が、私に絶え間なく襲いかかった。これは、私の傍にじかにあったわけではないにせよ、かつて見たことのなかった像であった。こうした像は、悪夢のように私の魂の重荷となっていた、（中略）賛美という荘重な宣伝（からなるゲーリングの演説）は、犯罪的でディレッタント的な戦争の遂行という破局的な帰結から目を逸らし、責任という問いを決して起こさせないことを明らかに意図していた。」(Wieder, Joachim: Stalingrad und die Verantwortung der Soldaten, mit einem Geleitwort von Helmut Gollwitzer, München 1962, S.102f..) s. Plivier, Theodor: Stalingrad (1945), Augsburg 1998, S.345f..上の引用の最後の部分について、「テルモピュライの戦死者碑銘」を引き合いに出し、それを現在の状況に即して言い換えることは、「高度な釈明としての潜在的な可能性があった」（Albertz, Anuschka: Exemplarisches Heldentum. Die Rezeptionsgeschichte der Schlacht an den Thermopylen von der Antike bis zur Gegenwart, München 2006, S.298）ことが指摘されている。

５）曽田、同上、注85）を参照。

６）Vacano, Otto Wilhelm von: Sparta. Der Lebenskampf einer nordischen Herrenschicht (1940), Kempten [2]1943, S.120.

７）Roche, Helen: Sparta's German Children. The ideal of ancient Sparta in the Royal Prussian Cadet Corps, 1818-1920 and in National Socialist elite schools (the Napolas), 1933-1945, Swansea 2013, p.215, 219. これに対して「第二帝国の時代、ギリシア・ローマ史に関する知識は中等学校、高等学校、学年別学級からなる小学校においてのみ伝えられたので、およそ９割の男子生徒と９割以上の女子生徒は学校に通っていた間、テルモピュラ

は、スパルタがより多くの注目を浴びた。

独ソ戦でモスクワ攻勢が失敗しドイツが守勢に回らざるを得なくなって以来、ヒトラーはドイツのソ連に対する戦いを（当時ドイツがその大部分を占領していた）「ヨーロッパEuropa, Abendland」の防衛の名の下に正当化した。その際、かつてギリシアがペルシア戦争に勝利を収め（今日の）ヨーロッパを守ったことに、模範が仰がれた[8)]。ゲーリングの演説においてテルモピュライの戦いでのスパルタ兵の奮戦も、（ドイツのみならず）ヨーロッパの防衛という新しい文脈の中に置かれた[9)]。ドイツ軍が（ペルシア戦争時のギリシア軍とは異なり）侵略者であったことは、等閑に付された。

第三帝国の宣伝大臣ヨーゼフ・ゲッペルス（Josef Goebbels）も東方（ソ連）に対する戦いの正当性を、ヨーロッパの防衛の名の下に繰り返すに至る[10)]。その一例が1943年２月17日ベルリンにおいて行われた、有名な総力戦演説である。スターリングラードにおけるドイツ国防軍第六軍の降伏という、戦局の悪化による危機意識に触発され、ゲッペルスは捲土重来を期し、この総力戦演説を行った。「総力戦こそ戦争を最も早く終わらせる」というスローガンの下、彼がレトリックを駆使した演説の中には、「ドイツ民族は、高貴と卑賤、貧富の差を問わず、全ての人に*スパルタ人に則った生き方*を望みます」[11)] という言葉が出て来る。かつてルストが平時にドイツ人全体に求めたあり方[12)]、すなわち個人が国家に全てを捧げるあり方を、ゲッペルスは戦時にも求めた。

1944年から1945年にかけてのドイツにおいて、戦局の悪化に伴い特別攻撃隊の考えが生まれる。つまりＶ１号に似た有人ロケットを飛行機に装着し空中から発射し、これを人に操作させ橋など戦略的な目標にぶつけ命中率を高める、生還を当てにすることのない部隊の編成である。この部隊はテルモピュライのスパルタ軍にあやかって、レオニダス部隊と名付けられるはずであった（この部

イの戦いについて聞いたことがなかった」（Albertz, A.: a.a.O., S.235）。

８）「ギリシア人がペルシア人という侵略者の侵入を阻止した時、彼らはギリシアという自らの狭い故郷ではなく、今日ヨーロッパと呼ばれるあの概念を守ったのだ。（中略）かつてギリシア人（ママ）がカルタゴ人に対してローマではなく（中略）全ヨーロッパを守ったように、ドイツは今日も自らのためではなく、我々の全（ヨーロッパ）大陸のために戦っているのだ。」（Domarus, Max: Hitler. Reden und Proklamationen 1932-1945, kommentiert von einem deutschen Zeitgenossen, Bd.Ⅱ, Würzburg 1963, S.1796f..）

９）Krüger, P. : a.a.O., S.391f., 395f..

10）Goebbels, Josef: Goebbels-Reden, Bd.2: 1939-1945, hrsg.v.Helmut Heiber, Düsseldorf 1972, S.175f., 178f.. s. Kroll, Frank-Lothar: Utopie als Ideologie. Geschichtsdenken und politisches Handeln im Dritten Reich, Paderborn/München/Wien/Zürich 1998, S.304-308.

11）Goebbels, J. : a.a.O., S.195. ゲッペルスは第三帝国の他の幹部に漏れず、スパルタに共感を抱いていた。彼は1936年にスパルタを訪れた際、「スパルタで、私はドイツの都市にいるかのように感じた」（Fleischer, Hagen: Die “Viehmenschen” und das “Sauvolk”. Feindbilder einer dreifachen Okkupation: Der Fall Griechenland, in: Kultur - Propaganda - Öffentlichkeit, hrsg.v.W.Benz u. G.Otto, Berlin/Metropol 1998, S.135）と記している。

12）曽田、同上、注75）を参照。

隊は実際に編成されたものの、実戦に投入されるには至らなかった）[13]。

1945年２月６日、ヒトラーはベルリンの総統官邸において次のように語ったことが記録されている。「絶望的な戦いも、それ自体の中に熱心に見習うべき永遠の価値を持つ。そのためには、レオニダスと彼の従えた300人のスパルタ市民のことを考えるだけで十分だ！　雄羊の群れのように畜殺台へ連れてゆくことは、ドイツ人のあり方に決して相応しくないことだった。我々（ドイツ人）は絶滅させられるかもしれないが、我々を無抵抗に畜殺台へ連れてゆくことはできない。」[14]

1945年３月18日、ソ連軍によるベルリン攻撃が間近に予想された時期、第三帝国におけるスポーツ行政で重要な役割を演じたカール・ディーム（Carl Diem）は、ベルリンの帝国競技場に集まった約1400名の少年兵を前に訓辞を垂れた。彼はかねてから模範としてのスパルタについて、公の場でしばしば言及していた[15]。上の訓辞の中でディームは、スパルタのテュルタイオスの詩句を引いた。つまりテュルタイオスは、第二次メッセニア戦争にスパルタが敗北すれば、ヘイロータイ（奴隷）の報復がスパルタ市民を待ち受けていることを警告し、スパルタ市民の奮起を促した[16]。これと同様ディームは独ソ戦でドイツが敗北すれば、ドイツ軍が多くの場合に人間扱いしなかった[17] ソ連兵の報復がドイツ人を待ち受けていることを説き、ドイツの少年兵に「祖国に殉ずる死」を促したのである[18]。

13）カール＝ハインツ・ランゲ（Karl-Heinz Lange）中尉の発案による。第三帝国下の有名な女流パイロットであるハンナ・ライチュ（Hanna Reitsch）の賛同を得、彼女はヒトラーへこの案の実現へ向けて働きかけた。しかしヒトラーは消極的であった（Gellermann, Günther W.: Moskau ruft Heeresgruppe Mitte: Was nicht in Wehrmachtsbericht stand. Die Einsätze des geheimen Kampfgeschwaders 200 im Zweiten Weltkrieg, Koblenz 1988, S.42-60）。

14）Hitlers politisches Testament. Die Bormann Diktate vom Februar und April 1945. Mit einem Essay von Hugh R.Trevor-Roper und einem Nachwort von André François-Poncet, Hamburg 1981, S.51f..

15）「最後の例として、ドイツにおける新しい生の秩序を取り上げるに留めよう。今日のドイツが世界観と力とする多くのものは、古代スパルタの遺産だ！」（Laude, Achim/Bausch, Wolfgang: Der Sport-Führer. Die Legende um Carl Diem, Göttingen 2000, S.174.）

16）曽田、同上、pp.203-204.

17）同上、p.219.

18）ジャーナリストのラインハルト・アッペル（Reinhard Appel）はこの演説を聞き、その時の経験を1984年４月26日に「第二次世界大戦末期におけるドイツのスポーツ」という会議で発表した。この発表は、ディーム批判の大きな波を引き起こした（ミュンスター、インゴルシュタットなどにあったカール・ディーム通りは名前が取り消され、彼は「記憶の抹殺damnatio memoriae」に遭った。この「記憶の抹殺」は、古代ローマ時代に悪政を敷いた皇帝の肖像が、後に貨幣の表面から削られた故事に由来する）。アッペルが問題視したディームの演説が実際に行われたか否か、後に疑義が呈された。しかし彼の著作や遺稿等を調査し、この演説の準備と思われるメモ等が見つかったことから、今日この演説が行われた信憑性は高いとされている。この問題については、Lenartz, Karl: Reinhard Appel und Carl Diems Rede am 18. März 1945, in: Erinnerungskultur im Sport. Vom kritischen Umgang mit Carl Diem, Sepp Herberger und anderen Größen des deutschen Sports, hrsg.v.Michael Krüger, Berlin 2012, S.225-241を参照。

1945年４月末、古代史家のヘルムート・ベルヴェ（Helmut Berve）は、空襲で中心部がほぼ灰燼と化したミュンヘンで５月２日に公開講演を行う予告を出していた。彼は本論文の前半で触れたように、教育や学問の世界でスパルタが多く論じられる際、重要な役割を演じていた[19]。公開講演のテーマは、スパルタに関するものであった[20]。しかし４月30日、アメリカ軍がミュンヘンを占領したため、この講演は行われるに至らなかった。

第一章においては、スパルタの特徴を身分の三層構造、スパルタ市民の教育、自給自足体制、文学に詠われた軍事面での活躍という四つの点からまとめた。第二章、第三章の結びとして以下、スパルタのこうした四つの特徴がナチズムの世界観・施策に実際にどのように反映していたのか、整理を行う。

第一に身分の三層構造について、スパルタにあってはスパルタ市民がペリオイコイやヘイロータイを自らの支配下に置いていた。これと似て第三帝国においてはドイツ人がユダヤ人を差別し、東方の占領地域においてロシア（の周辺）民族を自らの支配下に置いた。その際スパルタは、こうした支配を歴史的に正当化する根拠とされた。このような人種政策は第三帝国下に実施され、占領政策は第二次世界大戦中に一部、その実現が図られた。

第二にスパルタ市民の教育について、その軍事的教育制度に倣って、民族共同体教育施設およびアドルフ・ヒトラー学校、「ヒトラーユーゲント」という学校内外の組織において、「祖国に殉ずる死」を最高の価値とする教育が行われた。第三帝国下のドイツ社会において多く見られた「Lager」というライフスタイルも、スパルタの軍事的教育制度のそれと重なるものであった。

第三に自給自足体制について、「血と土」のスローガンに現れた農本主義、土地の一子相続を骨子とする「帝国世襲農場法Reichserbhofgesetz」にその影響が表れていた。商業の軽視ないしは蔑視、いわゆるグローバル金権主義への批判も、スパルタと重なる点があった。独ソ戦も、自給自足体制の確立が大義名分の一つとされた。

第四に文学に詠われた軍事面での活躍については、第三帝国の敗色が濃くなるに従って、テュルタイオスの「エレゲイアー」およびシモニデスの「テルモピュライの戦死者碑銘」、スパルタ王レオニダスの姿が戦意高揚のためにしばしば引用された。スターリングラード包囲網下のドイツ国防軍第六軍への呼びかけ、特別攻撃隊の結成、ソ連軍のベルリン攻撃を前にしたドイツ少年兵への呼びかけなどがそれに当たった。総力戦演説に際してはスパルタ人のあり方が、ドイツ人が模倣すべき模範とされた。

19）曽田、同上、pp.221-222.

20）Münchner Neueste Nachrichten v. 28.3.1945. s. Losemann, Volker: The Spartan Tradition in Germany, 1870-1945, in: Sparta in modern Thought: Politics, History and Culture, edited by St.Hodkinson/I. Macgregor Morris, Swansea 2012, p.294.

第四章　第三帝国のスパルタ崇拝に対する国外での賛否

スパルタを様々な点で模範として仰いだ第三帝国のあり方は、外国人にはどう見えていたのだろうか。本章においては、これについて検討を行う。第三帝国でのスパルタ崇拝に対しては、ドイツ国外において賛否両論があった。

１．肯定的な見解――リシュタンベルジュ

まずこれを評価した人として、フランスのソルボンヌ大学でドイツ文学の教鞭を執っていたアンリ・リシュタンベルジュ（Henri Lichtenberger）が挙げられる。彼は『近代ドイツ』という著書の第二版（1937年）で、「スパルタ主義」という章を追加している[21)]。この章の中で彼はドイツにおけるスパルタ主義の成立を、ドイツ青年運動の延長上から捉えた。すなわち富や快適さを追求し、自然や大地から疎外されているブルジョワに対する反感から第三帝国のスパルタ主義が生まれたという。そして第三帝国の教育体制とスパルタの教育体制の類似を指摘している[22)]。その際リシュタンベルジュは、「このこと（ドイツ人の生活の簡素化）は、（スパルタ主義という）禁欲主義への憧れよりも、むしろ（世界大恐慌の影響などによる）生活水準の不可避的な低下に帰せられるのかもしれない」[23)] と冷めた見方を一面で行っている。しかし他方で、

> 「（ドイツの）若者の集会を見学し、労働キャンプ（Arbeitslager）を訪問し、ニュルンベルクの（ナチ）党大会のような公共の実地宣伝に参加した後ドイツから帰ってきた外国人は、ドイツ人の生活は活性化したという印象を持つに違いない、と私は言えるに過ぎない。（中略）最後に私（リシュタンベルジュ）は、（第三帝国の）スパルタ主義はいかなる意味においても精神の遅鈍を意味しない、ということを強調したい。ドイツが突然、野蛮人の国になったと信じるのは難しい。（中略）スパルタ主義を単に野蛮の表れと見なし、スパルタ主義が備える精神的な価値の多くを認めないことは、それに関する我々の留保がどのようなものであろうとも、愚かな独断論であり、極端なイデオロギーであろう。」[24)]

と述べている。この文章が発表された（1937年）後のドイツにおけるスパルタ主義の展開を振り

21）Lichtenberger, Henri: L'Allemagne nouvelle, Paris 1936, pp.153-175. Lichtenberger, Henri: The Third Reich, translated from French and edited by Koppel S. Pinson, with a preface by Nicholas Murray Butler, New York 1937, pp.164-184. 以下、引用の日本語訳は英訳に基づく。

22）Lichtenberger, H.: The Third Reich, op.cit, pp.164-165.

23）Op. cit, p.180.

24）Op. cit, pp.180-183.

返ると、第一章から第三章にかけて述べたように、精神の遅鈍や野蛮の表れという面があったと言わざるを得ない。したがって1937年当時、ナチズムの野蛮性がおおむね顕在化していなかったとしても、リシュタンベルジュのドイツ文学研究者としてのドイツへの愛や贔屓目が、ドイツの現実や将来への洞察を曇らせたと言えるのかもしれない。上の引用文中の「スパルタ主義が所有する精神的な価値」として、リシュタンベルジュはスポーツ教育の重視、犠牲への意志、自己抑制といった点[25]を挙げている。「スパルタ主義が備える精神的な価値の多くを認めないこと」を「極端なイデオロギー」として退けるリシュタンベルジュの立場は、「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（一）」の第二章の最後で紹介した、（日焼け止めクリームの広告に表れた）「健康的なイメージを喚起したスパルタ像」を彷彿させる[26]。

２．批判的な見解――エーレンベルク

他方、第三帝国におけるスパルタ崇拝を、スパルタを論じつつ外国から批判的に捉えた人もいた。その代表例は、古代史家のヴィクトール・エーレンベルク（Victor Ehrenberg）である。彼はユダヤ系のドイツ人で、1929年からチェコスロヴァキアのドイツ・プラハ大学で古代史の教鞭を執っていた。エーレンベルクは1920年代からスパルタに関する研究を始めており、次の引用に見られるように、スパルタの偉大さを一方で認めるのに吝かではなかった。「こうした（スパルタの）人間の一面的なあり方は、その偉大さでもある。訓練された男らしさという理想が、この（スパルタにおける）ように純粋に実現されたことはかつてなかった。」[27] しかし彼は1934年、「全体主義的な国家」というタイトルでプラハにおいて行ったラジオ放送において、スパルタを批判するに至った。エーレンベルクのスパルタ批判の一部を以下、紹介する（彼は後にイギリスへ亡命し、この放送の内容は第二次世界大戦終了後の1946年、初めて活字として公にされた[28]）。彼はこの放送において、まずスパルタにおける身分の三層構造に対して批判を行っている。

> 「こうした（スパルタ市民の血を引く男女の間で生まれた人しか原則として嫡子として認めない）仕方によってスパルタは、――意図することなく――自らの市民の下でかなり純粋な“人種”を保ちました。戦士からなる小さな（スパルタ）民族は、実質的な変化を悉く現実に締め出す一種の人為的な優生学によって、自らの生物学的な存続を慮りました。ひょっとしてこれ

25）Op. cit, p.165.

26）曽田、同上、pp.223-224.

27）Ehrenberg, Victor: Sparta, in: Paulys Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft, Zweiter Reihe, 6.Halbband, Stuttgart 1929, S.1383.

28）Ehrenberg, Victor: Aspects of the Ancient World. Essays and Reviews, Oxford 1946, pp.94-104.

こそ、スパルタが短期間に没落した決定的な原因だったのかもしれません。」[29)]

上の引用部で、スパルタは（ヒトラーがそう捉えたような[30)]）人種国家と見なされている。こうしたスパルタ観から、エーレンベルクはスパルタに関する見解の中に、第三帝国についての自らの見解を多かれ少なかれ投影していたことが推測される。このようなスパルタと第三帝国に関する見方の重なりに留意して、エーレンベルクの放送からの引用部を以下、検討してゆく。第三帝国は、ナチズムの宣伝によれば「千年王国」と称された。しかしエーレンベルクは上の引用部においてこうした呼称とは裏腹に、第三帝国は人種主義を奉じるために短期間のうちに没落する可能性を仄めかしている。

「テルモピュライの戦いで“国法ニ従ヒ”戦死した300人は、かかる（スパルタ的な）人間類型を永遠に証明する存在です。もっとも我々は、彼らの英雄精神が自由な決断に基づいたわけではなく、服従、伝統、なかんずく恐怖によって強制されていたことを、決して忘れるべきではないでしょう[31)]。」[32)]

第一章の４において、シモニデスの「テルモピュライの戦死者碑銘」に詠われた、戦うスパルタ市民の姿が、後世のドイツ・ヨーロッパの人々に長い影響を及ぼしたことに触れた[33)]。就中それは、第二章の３で述べたように、アドルフ・ヒトラー学校での教育、あるいは第三章の最初に述べたように、ゲーリングがスターリングラードにおけるドイツ兵の奮戦を讃えた際に重要な役割を果たした。彼は、ドイツ国防軍第六軍の兵士が自発的に自らの命をドイツのため犠牲に捧げるべきこと、英雄精神の発露を説いたわけである。しかしエーレンベルクは1943年に行われたゲーリングの演説に先んじて、ナチスの模範とされたテルモピュライのスパルタ兵が自発的にではなく、強制によって死へ赴いたという穿った説を開陳している。エーレンベルクは、後にゲーリングがこの戦いにお

29）Ehrenberg, Victor: Ein totalitärer Staat (1946), in: Sparta, hrsg.v. Karl Christ, Darmstadt 1986, S.222.

30）曽田、同上、注36）を参照。

31）アリストテレス『ニコマコス倫理学』第三巻第八章を参照。「刑罰への恐れに基づく勇敢さは、アリストテレスによれば人倫的に完成した人格による行為ではない。なぜなら、こうした行為は自由な決断を示すのではなく、法（ノモス）に強制されたものだからである。」（Nickel, Rainer: Der Leonidas-Komplex. Das Thermophlen-Epigramm als ideologischer Text, in: Der Altsprachliche Unterricht. Arbeitshefte zu seiner wissenschaftlichen Begründung und praktischen Gestalt, Bd.6, 1995, S.25.）

32）Ehrenberg, V. : Ein totalitärer Staat, a.a.O., S.223.

33）曽田、同上、注16）を参照。

けるスパルタ兵の死をドイツ人の戦意高揚のため利用することに対して、予防線を張っていたかの如くである。

「後世スパルタは全てのギリシア国家の中で唯一、イスラエルの国家および民族と友好的で頻繁な関係を結びました。ひょっとしてスパルタ人は――自らの神聖で、人為的に守られた法(ノモス)を誇りに思い――、イスラエルの中に、ユダヤ人の（スパルタ人と）同様に厳格で神聖な法律の下に、（自らと）似たライフスタイルを見出したと考えたのかもしれません。」[34)]

これも興味深い指摘である。ユダヤ人はアブラハムの息子イサクの末裔である一方、スパルタ建国の祖はアブラハムが奴隷女ハガルまたは妻ケトラとの間に儲けた息子に遡る、という言い伝えがあった[35)]。この言い伝えが正しければ、ユダヤ人とスパルタ人は共通の血を引くということになる。スパルタがイスラエルの国家と交流したのはヘレニズム時代、前 3 世紀から前 2 世紀にかけてのことである。旧約聖書の外典に、イスラエルの大祭司ヨナタンがスパルタに手紙を送り、同盟関係を結んだという記述がある[36)]。ところでナチスにとってユダヤ人は劣等民族の代表、ヘイロータイと同等ないしはそれにすら値しない排除すべき民族であった。ところがエーレンベルクは上の引用文で具体的な事実ないしは文献に基づいて、ナチスが模範と仰いだ「スパルタ人とユダヤ人の親縁性」[37)] について指摘した。これは、ドーリア人の北方起源説、「スパルタ人とゲルマン人の親縁性」に依拠したナチスにとって、きわめて不都合な指摘であったと言わざるを得ない[38)]。

「アテナイの民主主義が没落し崩壊した後ですら、そこから偉大な精神の持ち主が生まれました。

34）Ehrenberg, V. : a.a.O., S.225. ただしブルクハルト・カルダウンス（Burkhart Cardauns）は、ユダヤ人とスパルタ人の相違について次のように記している。「ユダヤ人の律法は2000年以上の歴史を持ち、（スパルタ人の国法よりも）はるかに古い。スパルタ人は独立していた間、法を保持したが、後にほとんど全ての法を放棄した。他方ユダヤ人は最大の困窮に際しても律法に頼った。スパルタ人は、ユダヤ人のように難儀な農耕や手仕事と携わることはなく、こういったことを他人の手に任せ、支配権を得るため出征した。」（Cardauns, Burkhart: Juden und Spartaner. Zur hellenistisch-jüdischen Literatur, in: Hermes. Zeitschrift für klassische Philologie, Bd.95, Heft 3, 1967, S.324.）

35）Rawson, Elisabeth: The Spartan Tradition in European Thought, Oxford 1969, pp.167-168.

36）「第一マカバイ書」12章1～23。s. Cardauns, B. : a.a.O., S.317.

37）Cardauns, B. : a.a.O., S.318, 322, 324.ただし両者の間には、国家の「法Gesetz」あるいは神の「律法Gesetz」に従うかをめぐって、大きな相違があった（A.a.O., S.324）。

38）カール・オトフリート・ミュラー（Karl Otfried Müller）がすでに『ドーリア人』において、スパルタとユダヤの比較を行っていた。s. Müller, Karl Otfried: Die Dorier (1844), Hildesheim, 1989, Bd.1, S.47, 135.

これに対してスパルタは前六世紀以後、芸術家、詩人、思想家を誰一人として輩出しませんでした。（中略）（極端な国家類型と人間類型を生み出したという）スパルタとスパルタ市民の偉大さは、否定できません。しかしあらゆる権威主義的で全体主義的な国家にあってこうした初の、最も壮麗な（スパルタ）国家の中で、創造的な生の泉は完全に干上がってしまいました。スパルタの運命は、以下の我々の確信を裏付けます。すなわち強制と服従――それはあらゆる国家生活が必要とする手段ですが――は、真の共同体の建設を目指す人間の骨折りにとって、十分な目的とは決してなり得ないということです。スパルタは、我々が模倣すべき模範を築き上げませんでした。それはむしろ、我々が避けなければならない危険を警告しているのです。」[39)]

上の引用部の冒頭で、前 6 世紀以後のスパルタにおいて学芸のレベルが低かったことが述べられている。これと同様、第三帝国においても、体制批判的なドイツの学者・芸術家、ユダヤ系の学者・芸術家が公職から追放され、その多くが第三帝国を脱出した後、学芸のレベルは全体として顕著に低下するに至った。さらに上の引用部においては、スパルタの（第三帝国に通ずる）「権威主義的で全体主義的な国家」としての性格が、模倣すべき模範であるよりも、むしろ避けるべき危険であることが警告された。リシュタンベルジュが評価したような「スパルタ主義が所有する精神的な価値」に、エーレンベルクは懐疑的であった。「強制と服従」に「真の共同体の建設を目指す人間の骨折り」を対置するエーレンベルクの考えには、彼の信条が吐露されている。上の警告に耳を傾けずスパルタを主として模範として受容した第三帝国は、わずか12年のうちに滅びたのであった。

エーレンベルクのスパルタ観は「全体主義的な国家」としてスパルタを捉え、これを主として模範として受容した第三帝国に対する抜本的な批判となっている。第二章と第三章においては、第三帝国におけるスパルタ受容を．人種政策、農業政策、教育政策、占領政策、第二次世界大戦中の戦意高揚という五つの観点から整理した。これらの政策や試みが実施ないしは構想されるのに先立ってエーレンベルクは、特にスパルタを模範とした人種政策、戦意高揚に対する批判を行っていたと

39）Ehrenberg, V. : a.a.O., S.227f..ドイツ在住のユダヤ人が刊行する雑誌において、スパルタの人種的な閉塞に対する批判が1920年代の末期、すでに行われていた。「自らに与えられた時代を、逞しくなり人類の文化神殿で共同作業を行うために使おうとする民族は、閉塞という不自然な状態の維持を目的として自らの力を使い尽くすことはできない。小アジアの文芸を（スパルタへ）媒介したリュディア人アルクマンはスパルタ人に、特定の目標設定――この場合は故郷の文芸を刺激すること――は常に部族と人種の境界を越えてゆくことを示した。価値を創造しようとする民族は、世界へ目を開かなければならない。」（Funke, Hermann: Rasse, Leistung und Schicksal in Sparta. Die spartanische Geschichte: Ein Sieg des Stammesbewußtseins über den Willen zur Volksgemeinschaft, in: Der Morgen. Monatszeitschrift der Juden in Deutschland, Bd.5, 1929, S.64.）

言えよう[40]。

第二章において触れたベルヴェと、第三章において触れたエーレンベルクという二人の古代史家は、共にスパルタを研究対象とした。その際に彼らはスパルタや史観一般について、異なる見解を取るに至った。両者の見解の相違を以下、整理したい。

19世紀において考古学の発掘や実証研究の発達、交易や植民地化の進展などから、ヨーロッパ人の精神的な地平は拡大した。その結果、ギリシア・ローマ古典古代を考察の対象として特権化するのではなく、他の文化・文明との比較から普遍史的な視座の下に捉える史観が生まれていた。古代史におけるその代表者は、ベルリン大学教授のエドゥアルト・マイヤー（Eduard Meyer）である。彼は古代史を世界史の一部として把握した。普遍史的な研究の流れはギリシア・ローマ古典古代という規範の相対化を促し、第一次世界大戦の経験による伝統的な価値の動揺と相俟って、いわゆる「歴史主義の危機」へと連なった。かかる歴史主義的、普遍史的な研究への反動として1920年代のドイツの古代史家、人文主義者の間では、ギリシア・ローマ古典古代の本質を問い、その規範性の（従来とは異なる形での）復権が大きな流れとなりつつあった。（ベルヴェなどによる）ギリシアに関してアテナイよりもむしろスパルタに注目する研究、ヴェルナー・イェーガー（Werner Jaeger）を中心とする「第三の人文主義」は、その一例である。そういった中でエーレンベルクは20世紀前半のドイツの古代史家にしては珍しく、ギリシア・ローマ古典古代を世界の他の文化・文明との比較から普遍史的に捉える視座を堅持していた。彼は「普遍史または古代学？」において、「しかし最近、行われているような、普遍史一般を乗り越えられた観点として考察し、用済みとする試みに対しては、十分な疑念が残る」[41] と記し、「スパルタ人とユダヤ人の親縁性」への着眼も、彼による普遍史的な関心から生まれてきたものであった。

これを批判し、同時代の支配的な研究潮流に棹を差して（ドイツ人と人種が似ているとされた）ギリシア・ローマ古典古代の卓越性の復権を主張したのが、第二章において触れた[42] ベルヴェである。彼は、「古代オリエントの文化史に寄せて」（1935年）において、「普遍史は姿を消さなければならない。それは価値を強調する国民史のために、引き立て役つまり背景を引き渡さなければならない」[43]、「本質的に異なる人種の民族の固有性を理解しようとすることは、実際に最大の困難に突き当たると

40）「エーレンベルクの名前は、スパルタに関する体制迎合的な文学において大抵、避けられ、――あるいは明確に“非アーリア人”と名付けられた。」(Losemann, Volker: “Ein Staatsgedanke aus Blut und Boden” R.W.Darré und die Agrargeschichte Spartas, in: Klio und die Nationalsozialisten, Wiesbaden 2017, S.205.)

41） Ehrenberg, Victor: Ost und West. Studien zur Geschichtlichen Problematik der Antike, Brünn/Prag/Leipzig/Wien 1935, S.1f..

42）曽田、同上、pp.221-222.

43）Berve, Helmut: Zur Kulturgeschichte des Alten Orients, in: Archiv für Kulturgeschichte, Bd.25, 1935, S.220.

いうこと、いやそれどころかそういった理解はほとんど不可能であると私は主張したい。我々はカルタゴのモロク人の従者の思考や感情に身を置き移すことはできないし、ギリシア人の文化に強く触れたハンニバルすら我々にはその核心が異質で疎遠である」と述べた[44]。ベルヴェはエーレンベルクによる（スパルタという）「新国家の創設者」（1925年）、『東と西』（1935年）に対して、批判的な書評を著している[45]。片や亡命を余儀なくされたユダヤ系ドイツ人、片や第三帝国における名門大学の学長という、境遇が大きく異なるに至ったこの二人の古代史家は、第三帝国に対して対極的な態度を取った[46]。こうした相違は、両者の史観やスパルタ観の中に反映していたのである[47]。

その他、第三帝国におけるスパルタ受容は、イギリスにおいても批判的に捉えられていた。これに関しては、スティーヴン・ホドキンソン（Stephen Hodkinson）の論考を参照されたい[48]。

第五章　第三帝国のスパルタ崇拝に対する国内での批判

第三帝国におけるスパルタ崇拝は、国外で注目を浴びるのみならず、国内の少数派から批判的に捉えられていた。第二次世界大戦直後のドイツに至っては、スパルタ崇拝に対する批判が公然と行われるに至る。そういった中から以下、１. シュテファン・アンドレス（Stefan Andres）、２. 白バラの抵抗運動、３. 1944年７月20日のヒトラー暗殺未遂事件の周辺、４. ハインリヒ・ベル（Heinrich Böll）による批判を検討する。

１．シュテファン・アンドレス

最初にアンドレスのスパルタ観を取り上げる。彼は、カトリシズムの影響下に行われた創作によって第二次世界大戦前から同大戦後しばらくの間、ドイツで人気を博した作家である。彼は第三帝国下に発表された二つの作品において、スパルタに言及している。この二つの作品は、アンドレ

44）A.a.O., S.228. ナチズムにとってカルタゴは、ユダヤと並ぶ敵対像の一つであった。s. Rom und Karthago. Ein Gemeinschaftswerk, hrsg.v.Joseph Vogt, Leipzig 1943.

45）前者についてはBerve, Helmut: Victor Ehrenberg. Neugründer des Staates, in: Gnomon, Bd.1, 1925, S.305-317、後者についてはBerve, Helmut: Victor Ehrenberg. Ost und West, in: Philologische Wochenschrift, Bd.57, 1937, S.650-655を参照。

46）Rebenich, Stefan: Alte Geschichte zwischen Demokratie und Diktatur. Der Fall Helmut Berve, in: Chiron, Bd.31, 2001, S.474-491.

47）両者の比較については、以下の記述も参照。Wiesehöfer, Josef: Fritz Taeger (1935-1960), Victor Ehrenberg und der Alte Orient, in: In Solo barbarico..... Das Seminar für Alte Geschichte der Philipps-Universität Marburg von seinen Anfängen bis in die 1960er Jahre, hrsg.v.Volker Losemann, Kai Ruffing, Münster/New York 2018, S.240-244.

48）Hodkinson, Stephen: Sparta and Nazi Germany in mid-20th-century British liberal and left-wing thought, in: Sparta: The Body Politic, edited by Anton Powell and Stephen Hodkinson, Swansea 2010, pp.297-342.

スが1934年の春に行った、アテナイ、ミュケナイなどギリシアへの旅行から生まれたものである。

第一の作品として、アンドレスが1935年『ノイエ・ルントシャウ』に発表した「隔離(テ)された(メ)土(ノ)地(ス)の言語　私のギリシア旅行記から」（以下「隔離(テ)された(メ)土(ノ)地(ス)」と略）というエッセイに注目する。スパルタを訪れた感想を記した箇所の結びにおいて、彼は次のように記している。

> 「歴史から教訓を引き出せるとしよう。すると、民族は自己を永遠化しようとすることによってではなく、充実した自己を時代に与えることによって存続し続けることを強く証明するためには、今日のスパルタへ行くだけで十分であろう。そうだ、タイゲトス[49]は罪があるに留まらず、民族的な独善から生まれた傲慢である。スパルタは自らを保とうとして自らを失った。しかしアテナイは世界に自らを失った。こうして目に見え、目に見えないアクロポリスは我々の生きる日々に至るまで聳え立っている。」[50]

この引用においては世界に自らを開いたアテナイとは対照的に、自らの独自性を保とうとしたスパルタが「民族的な独善から生まれた傲慢」の名の下に批判されている。アテナイとスパルタの相違に関しては文芸面から、「テュルタイオスは、アテナイの精神性と比べるならば、何のことはない！　なぜなら彼は憑かれた従軍司祭に他ならないからだ」[51]とも述べられている。

第二の作品として、アンドレスによる『アステリの男』[52]（アステリはギリシアの地名）という長編小説に注目したい。この長編小説は、1937年フランクフルト新聞に連載された。長い別離の後に再会した主人公の父子がギリシア各地を共に回る旅行記、という体裁を取っている。この作品の単行本化に際して第二部に付け加えられた[53]補論に、スパルタに関する描写がある。以下この描写の内容と、同時代の第三帝国下でのスパルタ崇拝への含蓄について考えてみたい。

ギリシアの旅行中、息子ハンス・ブライヒャー（Hans Bleicher）はスパルタで休憩するよう父フランツ・グラティアン（Franz Gratian）に提案する。しかし父は「鉄のように鋭く冷たい声で」[54]こ

49）スパルタ市民の子供は生まれた後、部族の中の最年長者に試され、健康でないと判断された子供はこの谷へ遺棄された（曽田、同上、p.202）。

50）Andres, Stefan: Sprache des Temenos. Aus meinem griechischen Reisebuch, in: Die neue Rundschau, Jg. XLVI 1935, Bd.Ⅱ, S.73.

51）A.a.O..

52）Andres, Stefan: Der Mann von Asteri. Ein Roman, Berlin 1939.

53）フランクフルト新聞の編集者は『アステリの男』の時代批判という含蓄を読み取ったがゆえに、公刊前の印刷に、このスパルタに関する補論を敢えて掲載しなかったことが推測されている（Hans Sarkowicz/ Alf Mentzer: Literatur in Nazi-Deutschland. Ein biografisches Lexikon, Hamburg/Wien 2000, S.77）。

54）Andres, S. : Der Mann von Asteri, a.a.O., S.457.

の提案を拒否し、次のように語る。

「地球の表面から消えたこの場所（スパルタ）は、ギリシアの裏面と言われている。文学者や学校教師はパン切りナイフを上手に使えないのを恥じるあまり、スパルタの短剣に感動してそれを無責任な褒め言葉で饒舌に歌に詠んだ。これによってのみ血のユンカーは、今日なおヨーロッパ民族の学校の歴史授業で、取り上げる価値があると見なされている。」[55)]

「スパルタ受容（一）」において触れたように、古典文献学者のカール・オトフリート・ミュラー（Karl Otfried Müller）やヒトラーは、スパルタをギリシアの代表と見なした[56)]。しかし上の引用部の冒頭でスパルタは「ギリシアの裏面」と見なされ、第三帝国で支配的であったスパルタ観とは対極的な認識が語られている。アンドレスは、スパルタがギリシアの中で重要でないにもかかわらず喧伝されてきた理由を、文学者や学校教師の無責任な感動に帰す。実際シモニデスの「テルモピュライの戦死者碑銘」およびテュルタイオスの「エレゲイアー」は、ドイツ・ヨーロッパの学校や文学で長く語り継がれてきた[57)]。次に出て来る「血のユンカーBlutjunker」とは、スパルタ市民を指している。この言葉は、ナチズムのイデオロギーである「血と土」の「血」、プロイセンの（エルベ川東岸の）大地主「ユンカー」を結び付けたもので、第三帝国との関連を暗示している[58)]。

「そうだ、次のことは学校でお前（息子）に黙して語られなかった。スパルタは、地球にかつて存在した中で最も全体主義的な奴隷国家だ。スパルタの奴隷は、戦争捕虜と隷属させられた者だった。しかしスパルタには内戦しかなかったので――ギリシア人の真に華やかな戦場にスパルタは自らの兵を送らなかった！――スパルタの奴隷は血縁の者だけだった！」[59)]

上の引用部においてアンドレスは、スパルタをエーレンベルクの場合と同様に全体主義的な国家としてのみならず、奴隷国家としても性格付けている。そして奴隷の内実として、「戦争捕虜と隷

55）A.a.O..

56）曽田、同上、注24）と35）を参照

57）同上、注16）を参照

58）この言葉の由来については、Losemann, Volker: Stefan Andres und die Herrschaft der spartanischen “Blutjunker”, Regimekritik und literarische Sparta-Rezeption in der NS-Zeit, in: Mitteilungen der Stefan-Andres-Gesellschaft, Bd. 15, 2014, S.57を参照。

59）Andres, S.: Der Mann von Asteri, a.a.O., S.457.スパルタはプラタイアイの戦いには大軍を派遣したものの、マラトンの戦いには出兵せず、サラミスの海戦には僅かな数の軍艦しか派遣しなかった。

属させられた者」が特定される。第一章の１において、スパルタ市民がメッセニア戦争の結果メッセニアを征服し、先住民であるメッセニア人を奴隷としたことについて述べた[60]。アンドレスは、近年考古学的な観点から有力視されつつある「北方からのドーリア人の移住の否定」[61] をいわば先取りし、支配するスパルタ市民と支配されるヘイロータイは本来、血縁であり、内戦の結果、支配者と奴隷に分かれたと述べている。

こうしたスパルタ観の、同時代の第三帝国に対する含蓄はいかなるものであっただろうか。アンドレスが、エーレンベルクが指摘した「スパルタ人とユダヤ人の親縁性」のテーゼを知っていたか否か、不明である。いずれにせよアンドレスが上の引用部に基づいて、第三帝国におけるユダヤ人の迫害を暗に批判したとする主張がある[62]（アンドレスの妻はユダヤ系であり、夫妻は『アステリの男』の執筆当時、第三帝国下での迫害を避けるためイタリアに移住していた）。

> 「ああ結婚、子沢山。若者よ、気を付けるがよい！　スパルタ人にとって結婚は神聖であった、と我々は習わざるを得なかった[63]。――しかし彼らは服をさっと乱雑に脱いで毛布の下に潜り込み、子供、健康なスパルタ市民が生まれれば、それで万事よしとなった。しかしある民族が、是が非でも人口を増やそうとするならば、この民族の根底は腐りかけている。」[64]

スパルタにおいては健康な子孫の出産が至上目的とされ、子供の父親が母親の夫でなくともスパルタ市民であれば許され、放縦な性道徳が支配していたことが知られている[65]。これと同様に第三帝国においては、第二章の１で触れた「生命の泉（レーベンスボルン）」という施設の設立に見られたように、優秀とされたアーリア人種の代表たるSS（親衛隊）隊員が同じくアーリア人種の女性との間に婚外子を設けることは、公認されていた[66]。これは少子化を主たる原因として没落したスパルタを反面教師として、ドイツ民族の人口を増やすためであった。アンドレスは上の引用で、これに対する批判を行っていると考えられる[67]（アンドレスがその影響下にあったキリスト教において、子供は神の贈

60）曽田、同上、p.202.

61）Eder, Birgitta: Dorische Wanderung, in: Der neue Pauly. Enzyklopädie der Antike, Bd.3, Stuttgart 2003/2012, S.789.

62）Klein, Uwe: Stefan Andres' innere Emigration in Deutschland und im »Exil«, Mainz 1991, S.57.

63）プルタルコス「リュクルゴス」15（『英雄伝』）。

64）Andres, S. : Der Mann von Asteri, a.a.O., S.467.

65）プルタルコス「リュサンドロス」24（『英雄伝』）。

66）曽田、同上、p.210.

67）Losemann, Volker: Sparta als *Kehrseite* Griechenlands. Aspekte der literarischen Sparta-Rezeption im »Dritten Reich«, in: Kultur(en) – Formen des Alltäglichen in der Antike, Graz 2013, S.846.

り物であって人間が人為的に増やせるものではない[68)]）。

スパルタに関する描写の最後に、父は息子に対して次のように語る。

「（スパルタにおいては）全てが国家のためにあった。そして国家は――いったい誰のためにあったというのだろう？　これについてスパルタ市民はよく考えてみることすら許されなかったし、いわんやこれを疑問に思うことは許されなかった。なぜなら、最高かつ究極のものであるスパルタを超えるものが考えられなかったし、それを考えることが許されもしなかったからだ。（中略）（なぜ上で述べたことを語るのか、という息子の問いに対して）息子よ、それはよい質問だ。なぜお前に、こうした血で錆びて使いものにならなくなった（スパルタの）短剣について話をするのか？　それはおそらく、お前にはスパルタ市民ではなく、一人前の人間になってほしいからだ！」[69)]

スパルタ国家の本質をめぐる父子のやり取りの中で、スパルタ国家の絶対視は、第三帝国の絶対視と重ならざるを得ない。そしてこの二つの国家が共に批判されている。かかる国家批判の背景には、何があったのだろうか。それはおそらく、アンドレスへのカトリシズムの影響である。カトリック教会の教父アウグスティヌスはローマ帝国が滅亡しつつある混乱期、（ローマ帝国という）「地の国」と（教会という）「神の国」を対比し、後者の前者に対する優位を説いた[70)]。国家を超える権威に依拠するカトリック教会は、ナチズムの最大の敵の一つであった。

注55）の引用部においては、「血のユンカー」と「スパルタの短剣」という表現が用いられた。注69）の引用部においては、この二つの表現が否定的なスパルタを代表するものとして結び付けられた（「血で錆びて使いものにならなくなった（スパルタの）短剣[71)]」）。引用部の最後では（通常の意味での）人間性を嘲り[72)] スパルタ市民を模範とした第三帝国の教育に対して、（新人文主義を想起させる）人間性の立場から批判が行われている。

「隔離された土地」の冒頭には、「教養は順境にあっては飾りであり、逆境にあっては避難所である」というデモクリトスの言葉が掲げてある。フォルカー・ローゼマン（Volker Losemann）は、

68）特に『旧約聖書』の「創世記」に描かれているように、神の祝福を受けた者が子供を授かり、神の祝福なしに子供が生まれることはない。

69）Andres, S.: a.a.O., S.458f..

70）アウグスティヌス『神の国』を参照。

71）曽田、同上、p.224の画像で子供の持っている剣がそうである。

72）同　上、　注39、Rosenberg, Alfred: Der Mythus des 20. Jahrhunderts, eine Wertung der seelisch-geistigen Gestaltenkämpfe unserer Zeit München 1930, S.200f., 560f.などを参照。

アンドレスが1934年に企てたギリシア旅行が古典的な教養世界への逃走であったことを指摘している[73]。さらに『アステリの男』が、第二章で取り上げた[74] ゴットフリート・ベン（Gottfried Benn）の「ドーリア人の世界」に対する、（スパルタ観をめぐる）文学上の反対構想であったとも指摘している[75]。

『アステリの男』におけるスパルタ批判は、１の最初に触れた「隔離された土地」におけるスパルタ批判の延長上に構想されたと思われる。『アステリの男』は検閲の網をかいくぐり、1939年に出版された。当時、第三帝国を直接に批判することは許されなかったので、この長編小説は第三帝国が模範と仰いだスパルタに対する批判を通して、間接的に第三帝国の批判を行ったと言えよう[76]。

２．白バラの抵抗運動

1942年から1943年の２月にかけて、「白バラDie Weiße Rose」と称する、ミュンヘン大学の学生を中心とするグループが、ビラの配布等を通してヒトラーや第三帝国に対する抵抗を呼びかけた。彼らが匿名で配布した「第一文書」のビラは、キリスト教的でヨーロッパ的な文化の成員としての責任をビラの読者に説き、一人一人のドイツ人がファシズムや絶対主義国家のそれに似たシステムに抵抗すべきことを訴えた。この「第一文書」の中で、「各国民は、国民が担う政府に似ていることを忘れるな」という警告の後に、シラーの「リュクルゴスとソロンの立法」からの引用が次のように続く[77]。

> 「（前略）あらゆる人倫的な感情を犠牲にして政治的な功績が得られ、政治的な功績を実現するための能力が形成された。スパルタには結婚による愛、母の愛、子供の愛、友情がなかった。市民、市民的な徳以外のものは存在しなかった。（中略）国法はスパルタ人に、自らの奴隷に対して非人間的に振舞うことを義務とした。こうした戦いによる不幸な犠牲の中で人間性が踏みにじられ、価値なきものとされた。スパルタにおける法律それ自体の中で、人間を目的ではなく手段として考察するという危険な根本事項が説かれた。これによって、自然法と人倫性という確固たる基礎が合法的に取り壊された。（中略）（リュクルゴスの－原注）国家は、国民の精神が停止状態にあるという条件下においてのみ、存在し続けることができた。それゆえかかる国家は、国家の最高で唯一の目的を捉え損なうことによってのみ維持できたのであ

73）Losemann, V. : Sparta als *Kehrseite* Griechenlands, a.a.O., S.838.

74）曽田、同上、p.222.

75）Losemann, V. : Stefan Andres und die Herrschaft der spartanischen “Blutjunker”, a.a.O., S.58.

76）Stefan Andres, in: Literatur in Nazi-Deutschland, a.a.O., S.77.

77）Sophie Scholl und die “Weiße Rose” (http://www.bpb.de/themen/ZGSY8R,0,0, Flugblatt_ I.html).

る。」[78]

上の引用部における市民とは（国民から区別された市民ではなく）国家市民つまり国民のこと、「国家の最高で唯一の目的」とは自然法と人倫性を遵守することであろう。「人間を目的ではなく手段として考察する」とは、シラーが私淑したカントの定言命法の中で説かれカント倫理学の基礎に据えられた、「君が人間を、君の人格においても、どの他者の人格においても、単に手段としてのみならず、常に目的として必要とするように行為せよ」[79] という命題を転倒したものである。後者は近代ヨーロッパ啓蒙思想の基本了解の一つであり、これや人間性をナチズムは批判したのであった。上の引用において第三帝国を批判するために、シラーの筆を借りてスパルタが批判されていることは、言うまでもない。

「はじめに」において述べたように[80]、19世紀初期、ドイツ新人文主義の伝統的なギリシア観にあっては、人倫性や人間性を重視するアテナイがギリシアを代表するものとして主たる評価の対象となった。ところが本論において今まで論じてきたように、第三帝国にあってはむしろ軍事や教育を重視するスパルタがギリシアの代表として主たる評価の対象となった。白バラのメンバーは第三帝国におけるスパルタ崇拝を、（シラーがその代表者の一人であり、キリスト教的な愛や啓蒙思想の影響の入った）ドイツ本来の人文主義の伝統からの逸脱として、（アテナイがその具現とされた）人倫性や人間性の重視へ回帰することによって批判していると考えられる。同様の（スパルタに投影された第三帝国に対する）批判の仕方は、１において取り上げたアンドレスの場合にも伺うことができた。上のシラーの作品からの引用例に留まらず、ギリシア・ローマ古典古代は白バラにとって第三帝国を批判する際の重要な参照項となった[81]。

３．1944年７月20日のヒトラー暗殺未遂事件の周辺

上で取り上げた１、２はスパルタそれ自体を価値のないものとして否定し、それを模範として仰いだ第三帝国への批判を企図するものであった。ところでスパルタは、あらゆる面について価値の

78）Schiller, Friedrich: Die Gesetzgebung des Lykurgus und Solon, in: Sämtliche Werke, Bd.4, München 1980, S.817.

79）Kant, Immanuel: Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, Erlangen 1984, S.66f..

80）曽田、同上、p.200.

81）Onken, Björn: Humanistische Bildung im Widerstand. Die Weiße Rose und das kulturelle Erbe der Antike, in: Philippika. Marburger altertumskundliche Abhandlung, Bd.47, Wiesbaden 2011, S.227-248.ビラの執筆に加わったハンス・ショル（Hans Scholl）はプラトンなどギリシアの古典に関心を抱き、古代ギリシア語の授業を受けていることを書簡で両親に報じている（Brief an die Eltern vom 17.4.1939, in: Hans Scholl/Sophie Scholl: Briefe und Aufzeichnungen, hrsg.v.Inge Jens, Frankfurt am Main 1988, 30f.）。

ないものだったのだろうか。

1944年７月20日のヒトラー暗殺未遂事件の中心となったのは、周知のようにヒトラーの作戦本部に爆弾を仕掛けた、ドイツ国防軍大佐クラウス・シェンク・グラーフ・フォン・シュタウフェンベルク（Claus Schenk Graf von Stauffenberg、以下クラウスと略）である。彼には二人の兄がおり、この二人は双子であった。双子の兄の一人はベルトルト・シェンク・グラーフ・フォン・シュタウフェンベルク（Berthold Schenk Graf von Stauffenberg、以下ベルトルトと略）といい、外交官の道を進み、弟クラウスの暗殺計画を支援する[82)]。ベルトルトは暗殺計画が失敗に終わった後、逮捕され、処刑される。逮捕された後、彼の事務所においてスパルタと関係のある本の原稿が発見された。

それは『アギスとクレオメネス』[83)] という、プルタルコス『英雄伝』所収の一つの巻からの、自由な脚色を加えた抜粋である。この二人は第一章の４で触れた[84)] ように、貧富の差が拡大し堕落しつつあったスパルタの改革を志し、リュクルゴスの国制へ回帰しようと試み、非業の死を遂げた前３世紀のスパルタ王である。同書がアギスとクレオメネスの事績を顕彰するために著されたことは、冒頭にヘルダーリン『ヒュペーリオン』中の（ヒュペーリオンがベラルミンへ宛てた）言葉[85)] が引用されていることから、明らかである。

この抜粋本は1944年に出版された。本書の冒頭には、編者ヴィクトール・フランク（Victor Frank）が1943年２月26日に（ソ連の）スタラヤ・ルッサで戦死と記されている[86)]。ヴィクトール・フランクは彫刻家フランク・メーネルト（Frank Mehnert）の仮名で、彼はシュタウフェンベルク

82）双子の兄のもう一人はアレクサンダー・シェンク・グラーフ・フォン・シュタウフェンベルク（Alexander Schenk Graf von Stauffenberg）で、古代史学者となった。第二次世界大戦後、ミュンヘン大学の古代史講座教授となった。彼については、Christ, Karl: Der andere Stauffenberg: der Historiker und Dichter Alexander von Stauffenberg, München 2008を参照。

83）Frank, Victor: Agis und Kleomenes nach dem Plutarch, München 1944.

84）曽田、同上、p.205.

85）「私たち（ヒュペーリオンとディオティーマ）は暫し沈黙していた。全ての人の中にある、哀愁を大切にしていたのだ。私たちは語りと誇り高い思想を述べることによって、この哀愁から離れてしまうことを恐れていた。僅かな言葉を交わした後ディオティーマは、アギスとクレオメネスについて少し話してほしいと私（ヒュペーリオン）に頼んだ。私はしばしば熱烈な敬意を込めて彼らの名前を呼び、彼らはプロメテウス同様の半神に違いなく、彼らによるスパルタの運命をめぐる戦いは、輝かしい神話のどれにも勝るとも劣らず英雄的であると語っていたと言うのだった。アギスとクレオメネスの創造的精神は、テセウスとホメロスがギリシアの一日の曙光であったとすれば、その夕焼けなのだ、と。」（Hölderlin, Friedrich: Hyperion oder der Eremit in Griechenland, in: Sämtliche Werke und Briefe in drei Bänden, hrsg.v.Jochen Schmidt, Frankfurt am Main 1994, S.112.）

86）ドイツ語版WikipediaのFrank Mehnertによれば、３月29日に戦死（s. https://de.wikipedia.org/wiki/Frank_Mehnert_(Bildhauer)）。

兄弟と同様ゲオルゲ・クライスに属し、同兄弟と交流があった。同書の原稿がベルトルトの事務所で発見されたことから、彼が同書を刊行する指揮を執っていたことが明らかとなった[87]。ここで、なぜベルトルトがスパルタのアギス四世とクレオメネス三世に関心を寄せたのか、問わねばならない。その理由として、この二人のスパルタ王が、ヒトラーに対する抵抗のモデルとして考えられていたことが推測されている[88]。

これまでの検討で、スパルタが第三帝国の人種政策、教育政策、占領政策、戦意高揚のための模範として仰がれてきたこと、その多くが否定的な結果をもたらしたことを明らかにしてきた。しかし他方でスパルタを模範として仰いだ第三帝国の農業政策（貧富の差の拡大の阻止を目的とする、土地分割の禁止）、あるいはスパルタ市民の戦士としての徳目の中に、学ぶべき点があるのも確かである。本論の第二章「1. 農業政策」においてはR・ヴァルター・ダレー（R. Walther Dareé）による、「世界のある場所で、リュクルゴスと孔子はある意味で統一された。それは侍の時代の日本においてである」[89] という説を紹介した。実際にプルタルコス『英雄伝』やアドルフ・ヒトラー学校において配布された教科書『スパルタ　北方人種の生をめぐる戦い』の中には、「逃げる敵は追わない」[90]「城壁ではなく、武装した市民こそ城である」[91] など武士道の教えと似た、スパルタの教えが散見される。スパルタ市民がスパルタにおいてのみ通用する鉄の貨幣を使用したこと[92] は、昨今、注目を浴びている地域通貨の先駆けとも言えるであろう[93]。これらに代表されるスパルタの質実剛健、評価すべき点を、第三章の1において取り上げたリシュタンベルジュは、「スパルタ主義が備える精神的な価値」[94] と名付けていた。ベルトルトが評価したアギス四世とクレオメネス三世も、すでにヴァイマル共和国の時代に記された社会主義の流れを汲む短編小説において、しばしば理想的な王として描かれていた[95]。

上で述べたようなスパルタの肯定的な特徴から、第三帝国におけるスパルタ受容が一面的なものであったことを指摘せざるを得ない。第三帝国は、生存圏や自給自足体制の確保を口実に東方の侵

87）Zeller, Eberhard: Claus und Berthold Stauffenberg, in: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte, Jg.12, 1964, Heft 8, S.245.

88）Losemann, V. : The Spartan Tradition in Germany, 1870-1945, op.cit, pp.295-296. Hoffmann, Peter: Claus Schenk von Stauffenberg und seine Brüder, Stuttgart 1992, S.165, 518f..

89）曽田、同上、注73）を参照。

90）プルタルコス「リュクルゴス」22（『英雄伝』所収）。

91）Vacano, O. W. v.: a.a.O., S.76.

92）曽田、同上、p.203.

93）同上。

94）注24）を参照。

95）Losemann, V. : The Spartan Tradition in Germany, op. cit, p.259.

略を行った。他方スパルタが戦争を行うのは、防衛の時に限られていた。また第三帝国には、ヒトラーという絶対的な権力を持つ独裁者がいた。一方スパルタは頂点に二人の国王を戴き長老会が大きな権力を持つ、混合政体であった。

さてベルトルトのスパルタ受容に戻ると、第三帝国のスパルタ受容がおおむねナチスの蛮行を正当化するため濫用されたとしても、だからといってスパルタの理想それ自体を一概に否定してよいのか、という想いが彼の中にあったと思われる。ベルトルトもその一員であった1944年７月20日のヒトラー暗殺計画グループは、いわゆる国民保守派からなるとされた。彼らは共産主義や社会民主主義に基づく反ヒトラー・グループとは異なり、ドイツ・ヨーロッパの本来の伝統へ戻ることによるドイツの再建を目指していた。ベルトルトが、本来のスパルタとナチスに濫用されたスパルタを区別し、前者に戻ることにより後者に対する批判を目指したという推測は、彼自らが属した国民保守派の伝統主義的な志向からも首肯できる。

第三帝国においては第二次世界大戦中、書物の刊行が制限されていた。こうした時代状況の中で官製のスパルタ崇拝の高まりにより、スパルタに関する書物の刊行は比較的容易であったことが想像される。ベルトルトはおそらくこれを利用して、『アギスとクレオメネス』という書物を刊行した。しかしその刊行の意図は、いわば異端のスパルタ王に仮託して、官製のスパルタ崇拝および第三帝国を批判するものであった。

４．ハインリヒ・ベル

本論の第一章「スパルタについて」４においては、テルモピュライの戦いでのレオニダス麾下300名のスパルタ市民の玉砕が、シモニデスの「テルモピュライの戦死者碑銘」によって「祖国に殉ずる死」として讃えられたことを述べた。また第二章「ナチズムの世界観・政策とスパルタ」３においては、スパルタ、特にその「祖国に殉ずる死」を範とした教育が、第三帝国の様々な場で行われたことを明らかにした。さらに第三章「第二次世界大戦中のスパルタ受容」においては、「テルモピュライの戦死者碑銘」が第二次世界大戦中に戦意高揚のため、第三帝国の多くの場で引用されたことを検討した。

第二次世界大戦が第三帝国の敗北によって終わった後、敗北にまつわる現実を描き、その背後の真実に迫ろうとする、いわゆる「廃墟の文学」が生まれた。ベルはその代表者の一人である。彼の短編小説「旅人ヨ、スパルタノ地ニ赴カバ、彼ノ地ノ人ニ…」[96]（1950年）は、上述の「テルモピュライの戦死者碑銘」を手がかりに、第三帝国における教育面でのスパルタ受容を批判している。

96）Böll, Heinrich: Wanderer, kommst du nach Spa…, in: Werke. Romane und Erzählungen, Bd.1, 1947-1951, hrsg. v.Bernd Balzer, Köln 1987, S.194-202.

まず同作の粗筋をまとめておきたい。舞台は第二次世界大戦末期のドイツ、主人公は戦場で負傷した、人文主義ギムナジウムのかつての生徒である。彼が応急病院へ運び込まれ意識を取り戻した後、彼の目に入ったものの描写、それと関連した彼の反省が並行して作品が進行してゆく。応急病院の入り口では、死者が物のように扱われる殺伐とした会話が描かれる。主人公は担架に横たわったまま、階段や廊下を通って運ばれてゆき、ギリシア神話の登場人物（メデイア）、パルテノン神殿の古典建築の小壁、カエサル、キケロ、マルクス・アウレリウス、フリードリヒ二世、ニーチェ、ヒトラーなどの彫像や絵が、主人公の目に入る。主人公は自分のいる建物が、死者の家であるかのように思う。彼は部屋の調度などから、自分が住んでいた町に三つあった高等学校の一つに運び込まれたことを認めざるを得なくなる。しかし、自分が母校にいることを否定しようとする。体が横たえられた図画室で、主人公には七つの書体で黒板に書かれた「旅人ヨ、スパルタノ地ニ赴カバ、彼ノ地ノ人ニ…」という習字の文字が目に入る。それは紛れもなく彼自身の筆跡であり、彼は自分が母校にいることを認識する。書かれた文字は、大きすぎたため「テルモピュライの戦死者碑銘」の全文が黒板に収まり切らないだけでなく、「歪んでいた verstümmelt」。この認識とほぼ同時に包帯が解かれ、主人公は自分の両足と右手が「切断されている verstümmelt」ことを知り呆然とする。

次に「旅人ヨ、スパルタノ地ニ赴カバ、彼ノ地ノ人ニ…」の解釈へと移る。人文主義ギムナジウムは、戦時中に応急病院として使われ戦死者が安置されるという意味においてのみ「死者の家」であったわけではない。人文主義ギムナジウムは、生徒に「テルモピュライの戦死者碑銘」を範とした教育を行い「祖国に殉ずる死」者を生み出すという意味においても、「死者の家」であった[97]。主人公が運ばれた人文主義ギムナジウムで目にした、メデイアからヒトラーに至る、ギリシア・ロー

97）作家のクラウス・フーバーレク（Claus Hubalek）は1944年 7 月24日に西部戦線でつけた日記において、仲間であった10代の兵士の言葉を次のように書き留めている。「僕は非常にしばしば、学校のことを振り返って考えざるを得なかった。（中略）僕らは詩を学び、そういった詩の中ではいつも死が詠われており、何らかの存在、例えば神や王様など、大抵の場合は祖国のため死ぬことになっていた。このような詩の中で、いつも戦いや戦争や死について耳にした。常に死だけが話題となっていて、いつも祖国のため死ぬことになっていた。（中略）どうして僕らには、何かのために生きても構わないということが語られなかったのだろう？　そうだ、人は何かのために生きなければならないんだ。」（Hubalek, Claus: Unsere jungen Jahre, Berlin 1947, S.42.）「テルモピュライの戦死者碑銘」は、「祖国のために死ぬ」詩の代表例であった。スパルタが民族共同体教育施設やアドルフ・ヒトラー学校のみならず一般のギムナジウムの教育でも重要な役割を果たしたことについては、Gies, Horst: Geschichtsunterricht unter der Diktatur, Köln 1992, S.93を参照。「テルモピュライの戦死者碑銘」はベルの作品のみならず、第二次世界大戦後のドイツ文学において、様々な文脈において取り扱われた。ロデリック・H・ワット（Roderick H. Watt）はその例として11の作品を取り上げ、分析を行っている（Watt, Roderick H.: ‚Wanderer, kommst du nach Sparta‘: History through propaganda into litetary Commonplace, in: The Modern Language Review, vol.80 1985, pp.877-881.）

マ古典古代、人文主義、軍国主義と関連した一連の彫像や絵は、ギリシア・ローマ古典古代および人文主義がナチズムの世界観・政策の一つの根であったことを暗示している。作中で主人公は自分が母校にいるのではないかと訝る理由として、（ナチズムの理念に基づく文教改革［1938年］で）撤去された十字架の痕跡を挙げている。「十字架（の痕跡）は（まだ）そこにあった」という文章が三回、繰り返されることは、「旅人ヨ、スパルタノ地ニ赴カバ、彼ノ地ノ人ニ…」という文章が三回、繰り返されることに逆対応している。こうしてベルは、スパルタに代わる価値として（特に愛の重視に見られる新約的な）キリスト教を示唆している[98)]。

旧西ドイツは第二次世界大戦後、第三帝国という「過去の克服」に力を入れ、「旅人ヨ、スパルタノ地ニ赴カバ、彼ノ地ノ人ニ…」は長年、学校での授業教材に取り上げられてきた[99)]。

第五章においては、1.シュテファン・アンドレス、2.白バラの抵抗運動、3.1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件の周辺、4.ハインリヒ・ベルを手掛かりに、第三帝国のスパルタ崇拝に対する国内での批判を検討してきた。その結果、第三帝国におけるスパルタ受容の中から．人種政策（アンドレス、白バラ）、教育政策（アンドレス、ベル）、第二次世界大戦中の戦意高揚（ベル）に対する批判が行われたことが明らかとなった。彼らが第三帝国におけるスパルタ受容を批判する際、アテナイ（アンドレスと白バラ）、キリスト教（アンドレスと白バラとベル）、啓蒙思想（白バラ）、本来のスパルタ（1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件の周辺）が、重要な役割を果たしたのであった。

結語

本論の第一章においては「スパルタについて」、第二章においては「ナチズムの思想・施策とスパルタ」、第三章においては「第二次世界大戦中のスパルタ受容」、第四章においては「第三帝国のスパルタ崇拝に対する国外での賛否」、第五章においては「第三帝国のスパルタ崇拝に対する国内での批判」を検討してきた。その結果、スパルタにおける身分の三層構造、市民の教育、自給自足体制、文学に詠われた軍事面での活躍が第三帝国の人種政策、農業政策、教育政策、占領政策、第二次世界大戦中の戦意高揚に様々な形で影響を及ぼしたこと、当時の一般社会においてもスパルタ

98）s. Sander, Gabriele: Wanderer, kommst du nach Spa..., in: Heinrich Böll. Romane und Erzählungen, hrsg.v.Werner Bellmann, Stuttgart 2000, S.50f..「この短編（「「旅人ヨ、スパルタノ地ニ赴カバ、彼ノ地ノ人ニ…」」）において、人間性と希望はベルの作品でしばしばそうであるように、キリスト教からのみ生まれる」（Albertz, A.: a.a.O., S.332.）

99）大日本帝国における皇民教育の中心となった教育勅語には、「國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」という、「テルモピュライの戦死者碑銘」に比肩した表現がある。教育勅語は1948年に日本の衆議院、参議院で排除が議決された。

に対する高い関心が存在したことが明らかとなった。第三帝国のスパルタ崇拝に対してドイツ国外においては賛否両論が現れ、ドイツ国内においてはそれを批判する動きがあったことについても実証的に検討を行った。

スパルタは、第三帝国において過去の歴史からの恣意的な引用の一例に過ぎなかったわけではない。人種政策（いわゆるニュルンベルク人種法、Ｔ４作戦、「生命の泉（レーベンスホルン）」）において、　スパルタは明示的ないしは非明示的にその模範として仰がれた。農業政策において、第三帝国の食糧農業大臣ダレーは農本主義に基づく国家の理想をスパルタの中に見出し、「帝国世襲農場法」を制定した。教育政策に関して、スパルタを模範として特に民族（ナ）共同体（ボ）教育施（ラ）設およびアドルフ・ヒトラー学校（党幹部予備軍養成学校）において「祖国に殉ずる死」を最高の価値とする教育が行われた。ヒトラーユーゲントなどで普及した「Lager（ラーガー）」というライフスタイルもスパルタの影響下にあった。占領政策に関してスパルタにおける身分の三層構造は、ドイツがこれに倣って東方地域で人種的なヒエラルヒーを形成する一つの模範とされていた。こうした一連のスパルタ崇拝の高まりを背景として、第二次世界大戦中の戦意高揚のため、スパルタ市民の奮戦を詠ったテュルタイオスの「エレゲイアー」およびシモニデスの「テルモピュライの戦死者碑銘」がしばしば注目されたのは、不思議ではない。

引き続き、第三帝国においてスパルタ崇拝の高まりが生まれた思想史的な経緯を考察することにしたい。第三帝国におけるスパルタの受容は以下に示すように、ドイツ人の自己規定をめぐる試み、特に新人文主義におけるギリシアの規範性の立ち上げ、国家・社会の状況と関連したこの規範内容の変化から理解できよう。

1455年にタキトゥス『ゲルマーニア』の写本が発見された。同書に描かれた、（堕落したローマ人とは異なる）質実剛健なゲルマン人の姿は、宗教改革でローマ・カトリック教会と戦うに至った（プロテスタンティズム圏の）ドイツ人の肯定的な自己理解を助けた。他方ゲルマン人は（スパルタ人と同様）書かれたものを残さないなど文化的には見るべきものがなく、ドイツ人の自己形成の模範としては不適切であるという意見も現れた。ゲルマン人の姿は19世紀後期の民族主義的な運動の中で、改めて注目されるに至る。

18世紀後期から19世紀初期にかけてのドイツにおいては、古典主義の創造が花開いた。その創造は古典古代（特に古代ギリシア）を創作の源泉としており、ここから「ドイツとギリシアの親縁性」[100] というテーゼが生まれた。ギリシアの規範性はおおむね人間性の中に求められ、人間性の中には（プロテスタンティズムの影響下）キリスト教の隣人愛や（フランス革命の影響下）啓蒙主義

100）これについて詳しくは、曽田長人『人文主義と国民形成　19世紀ドイツの古典教養』（知泉書館、2005年）pp.106-114を参照。

の理性がしばしば投影された[101)]。「ドイツとギリシアの親縁性」の根拠は人間性のみならず文化（言語、国民性など）の中にも求められ、ドイツ人がギリシアを模範として個人ないしは国民として自己形成を遂げることが期待された（この「ドイツとギリシアの親縁性」は「フランスとローマの親縁性」に対置され、ギリシア・ローマを根源とするヨーロッパの［オリエント・アジアなど］非ヨーロッパに対する優位が前提された）。多様なあり方を示したギリシアの中で就中、模範とされたのはアテナイであった。

こうしたアテナイの高い位置付け、「ドイツとアテナイの親縁性」は、（祝賀演説など）公の場を通して、第一次世界大戦に至るまでおおむね保たれるに至る[102)]。しかし新人文主義に端を発する歴史学的な研究によって、アテナイの（政治的な混乱や奴隷制など、近代の観点から）規範的でも人間的でもない姿が、すでに19世紀初期に指摘され始めていた（アウグスト・ベーク［August Boeckh］『アテナイ人の国家財政』[103)]）。これとほぼ同時期、スパルタの（軍事、教育面などに見られる）独自性を探求しそれをギリシアの代表と見なす、ベークの弟子カール・オトフリート・ミュラー（Karl Otfried Müller）による『ドーリア人』が著された[104)]。アテナイとスパルタは多くの場合、対立的に捉えられたこともあり、本書はギリシアの規範性を（アテナイに代わって）スパルタの中に回復する試みと言える。普仏戦争におけるプロイセンの勝利の後ニーチェは、歴史学的な研究によって古典古代の規範性が破壊されることに対して、警鐘を鳴らした[105)]。すなわち彼は、自らの規範の破壊に無自覚な、同時代の形骸化したギリシア崇拝を批判し、ミュラーの影響下[106)] ギリシアの（スパルタが代表したような）残酷な側面を否定するのではなく、それをむしろ（アテナイが代表したような）高い文化が発達するための条件として捉えた[107)]。これと関連して彼は、本来のギリ

101）Newald, Richard: Humanitas, Humanismus, Humanität, Essen 1947, S.77f..これはフリードリヒ・イマニュエル・ニートハンマー（Friedrich Immanuel Niethammer）の人文主義観に如実に表れている。彼の人文主義観については、曽田長人「ドイツ新人文主義に見られるルターの影響――F.I.ニートハンマーを例に」（『経済論集』第42号第１巻、2016年、東洋大学経済研究会）pp.107-121を参照。

102）s. Curtius, Ernst: Griechische Geschichte, Berlin 1857-1861. Wilamowitz-Moellendorff, Ulrich von: Von des attischen Reiches Herrlichkeit. Rede zu Kaisergeburtstag 1877, in: Reden und Vorträge, Bd.1, Berlin 1901, S.27-64. Meyer, Eduard: Preußen und Athen, Berlin 1919.

103）Böckh, August: Die Staatshaushaltung der Athener (1817), Bd.1, Berlin ^{3}1886, S.708-711.

104）Müller, Karl Otfried: Die Dorier (1844), Hildesheim 1989. 曽田、前掲「スパルタ受容（一）」、pp.205-206を参照。

105）Nietzsche, Friedrich: Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik, in: Kritische Studienausgabe, hrsg.v.Girogio Colli und Mazzino Montinari, Berlin/New York, Bd.1 1988, S.141f.. A.a.O.: Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben, in: a.a.O., S.253, 267f..

106）Reibnitz, Barabara von: Ein Kommentar zu Friedrich Nietzsche, »Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik« (Kap.1-12), Stuttgart/Weimar 1992, S.72f., 106-108, 149f..

107）Nietzsche, Friedrich: Der griechische Staat, in: Kritische Studienausgabe, a.a.O., S.767, 774.

シアを（キリスト教の隣人愛や啓蒙主義の理性の影響から自由な）非人間的ではあるが自然で豊かなものとして構想した[108]。そして、これを師表としたドイツの文化改革を提唱したのである[109]。

19世紀の中期から後期にかけてミュラーおよびニーチェの影響は、一部の人の間に留まった。しかし同じ頃、プロイセン陸軍の幼年学校やドイツの青年運動を通してスパルタへの関心が見られたことは、すでに指摘したとおりである[110]。こうしたスパルタへの注目は19世紀末期、ゲルマン人に対する関心と結び付けられた。すなわちゲルマン人とドーリア（スパルタ）人は共に北方のアーリア人種に由来し、彼らアーリア人種こそ（イオニア［アジア］の影響の濃いアテナイ人や、ローマ人に代わって）人類の文化・文明の本来の担い手であるという。こうして「北方人種の神話」が形成されつつあった[111]。このように「ドイツとギリシアの親縁性」のテーゼは第三帝国に至るまで保たれたものの、19世紀末期にその内容の支配的な理解については「ドイツとアテナイの（人間性、文化を介した）親縁性」から「ゲルマン人とスパルタ人の（人種を介した）親縁性」[112] へと次第に変化しつつあった[113]。

第一次世界大戦において、ドイツの多くの知識人はドイツのフランスやイギリスに対する戦いを、文化の文明に対する戦いの名の下に正当化した[114]。かかる対立の一端は、新人文主義によるギリシアとローマの対立関係に由来した。第一次世界大戦は野蛮な様相を呈し、しかもドイツはこの戦いに敗れ、人間性や文化の無力が明らかになったと多くのドイツ人は考えた。かかる人間性や文化の無力は、19世紀の歴史学的な研究に基づく人文主義の展開とそれに対するニーチェの批判が予示していた事態でもあった。

第一次世界大戦後、民主主義に基づくヴァイマル共和国が成立した。ヴェルサイユ条約による多額の賠償金の支払い義務、支払いの滞りによるフランス軍のルール占領、それに触発された大イン

108）Nietzsche, Friedrich: Nachgelassene Fragmente 1875-1879, in: a.a.O., Bd.8, S.17f., 58.

109）曽田、前掲『人文主義と国民形成』、pp.323-344.

110）曽田、前掲「スパルタ受容（一）」、p.206.

111）　同　上、pp.206-207. Houston Stewart Chamberlain: Die Grundlagen des neunzehnten Jahrhunderts, Erste Hälfte, München 1899, S.825-867, bes. 836.

112）「ゲルマン人は他民族との結婚によって汚されることなく、独特で純粋な自らに等しい種族となった。」（タキトゥス『ゲルマーニア』４章、Tacitus: Germania, translated by M.Hutton, London 1963, pp.268-269.）

113）ただし第三帝国の時代、アテナイへの関心が消えたわけではない。当時アテナイについて言及する場合、優れた「Führer指導者・総統」ペリクレスに率いられたアテナイが注目される場合が多かった（s. Berve, Helmut: Perikles, Leipzig 1940, S.28.ヒトラーの側近アルベルト・シュペーアによれば、ヒトラーは自らをペリクレスに準えていた［Fest, Joachim: Hitler. Eine Biographie, Frankfurt am Main 1973, S.1117］）。

114）児島由里「＜文化＞対＜文明＞―第一次世界大戦における独仏知識人の言説戦争―」（『比較文学・文化論集』、東京大学比較文学・比較文化研究室、第16号、1999年）pp.57-83.

フレ、貧富の格差の増大、中産階級の貧困化、議会での小党分立による安定政権の欠如、政治的な左派と右派の側からのテロなどは、ヴァイマル共和国に対する不満[115] と、第一次世界大戦の戦勝国に対する雪辱の思いを強めた。こうしてヴァイマル共和国は文化的には多くの実りをもたらしたものの、短い相対的安定期を除けば経済的な停滞、政治的な混乱を呈した。その際、民主主義や資本主義に基づく内外の敵は、かつてのアテナイを想起させた[116]。かかるアテナイを対抗像として、スパルタに対する関心の高まったことが考えられる。カバレット（寄席）作者のディーター・ヒルデブラント（Dieter Hildebrandt）は第三帝国下の学校での経験について、次のように回顧している。

「私は我々に紹介された理想、つまり古代のスパルタにおける子供の教育のことをはっきりと覚えている。この理想は、国粋主義を奉じる教師によって生き生きと我々の目の前に繰り広げられた。例は巧みに選ばれた。つまりこの小さいスパルタは、経済的には強力だが根本において腐敗している（アテナイなど）民主主義（国家）に囲まれ、軍事教育を受けた自らの若者の力だけを頼りにした。こういった点で、敗北を喫し敵に囲まれた（第一次世界大）戦後のドイツは、敗れた戦争に恥辱を覚えるあまり弱り、（スパルタ市民と）似た、死を軽蔑する若者を教育した場合のみ、この恥辱を雪ぐことができるとされた。」[117]

スパルタが19世紀末期から20世紀初期にかけて関心を惹いた別の理由として、人文主義に対する批判の高まりを挙げなければならない。大衆ナショナリズムの主唱者は、同時代の古典語教育が知

115）「古代ギリシアとローマに関する見解は、クルト・ゾントハイマー（Kurt Sontheimer）が「反民主主義的」という概念で名付けたあの思想に強く影響されていた。なぜなら古代ギリシアとローマに関する思想の多くは、その内容が様々であるにもかかわらず、ヴァイマル共和国という民主主義国家を拒否する点で共通していたからである。」（Preuße, Ute: Humanismus und Gesellschaft. Zur Geschichte des altsprachlichen Unterrichts in Deutschland von 1890 bis 1933, Frankfurt am Main 1988, S.163.）

116）「我々は（アテナイにおける）アッティカ民主主義の異常発育を示すものとして――残念ながら――、（ヴァイマル共和国という）自らの最近の過去から、多くの類似した例を持っている。」（Hagen, Benno von: Wege zu einem Humanismus im Dritten Reich, in: Humanistische Bildung im nationalsozialistischen Staat, Leipzig/Berlin 1933, S.20.）s. Bogner, Hans: Die verwirklichte Demokratie. Die Lehren der Antike, Hamburg 1930. 同書はアテナイを「完成した民主主義」として捉え、「現在のドイツ人――本書は1930年に刊行された――に考える刺激を与え、民主主義の妄想から癒すべきであった」（Berve, Helmut: Hans Bogner, Die verwirklichte Demokratie. Die Lehren der Antike, in: Deutsche Literaturzeitung. Dritte Folge: Wochenschrift für Kritik der internationalen Wissenschaft, Bd.5, 1934, S.1325.）曽田、前掲「スパルタ受容（一）」、注28）も参照。

117）Platner, Geert (Hrsg.): Schule im Dritten Reich - Erziehung zum Tod? Eine Dokumentation, München 1983, S.63f..

育偏重[118]で、ドイツ・ゲルマンの民族性に疎遠[119]であると主張した。「財産と教養」の結び付き、古典教養の有無による階級格差は、社会民主主義の側からも批判の対象となっていた。こうして人文主義者は19世紀末期以来、多方面からの批判に曝された。その結果、古典語の授業時間数を徐々に減らし、人文主義ギムナジウムの卒業生による大学入学資格の独占を放棄した。（新人文主義やアテナイが代表すると見なされた）個人主義、美的な自己享受、世界市民主義に対する批判、国民ないしは民族共同体の形成への寄与は、1920年代から30年代にかけての（特に「第三の人文主義」の圏内にある）人文主義者の多くも与する意見となっていた。彼らにとって身体の教育を重視し、貧富の差が元来存在せず、市民の中での一体感を具現したスパルタは、古代ギリシアの（アテナイに代わる）新たな規範として適しているように見えたのである[120]。知識人層が師表としたギリシアと民衆に馴染みのあるゲルマンとの間の深まる断絶は、スパルタ崇拝を通して架橋が可能に思われた。

多かれ少なかれ（政治的な意味で）不自由でも、安定と平等を求めるドイツ人の多くが、スパルタに惹かれた。スパルタは、ヴァイマル共和国下の不如意な現状を解決する様々な主張の受け皿、歴史上の模範として適していた。スパルタという模範は、ドイツの対外的な威信の回復、（階級格差による）対内的な分断の克服に寄与すべきであった。その背景にあったのは、（新人文主義の）人間性に基づく普遍主義から（優勝劣敗の原則など）非人間性に基づく人種主義への反転であった。これが「ギリシアの呪縛下」[121]にあるドイツの中で、アテナイに代わってスパルタを理想視する、いわばパラダイム・チェンジ[122]と関連していた（ドイツの人文主義者の一部は、人間性の理想よりもギリシアの規範性を――それがたとえ非人間的なものであっても――守ることを優先した

118）Lorinser, Carl Ignatius: Zum Schutz der Gesundheit in den Schulen (1836), Berlin 1861.

119）ヴィルヘルム二世（Wilhelm Ⅱ.）による、1890年の学校会議での次の言葉を参照。「ギムナジウムには特にナショナルな基礎が欠けている。我々はギリシア人やローマ人ではなく、ナショナルな若いギリシア人を教育しなければならない。（中略）我々（ドイツ人）はギムナジウムの基礎としてドイツ的なものを取らなければならない」（Verhandlungen über Fragen des höheren Unterrichts, Berlin, 4. bis 17. Dezember 1890［1891］, in: Deutsche Schulkonferenzen Bd.1, Glashütten 1972, S. 72f..）

120）曽田、前掲「スパルタ受容（一）」、注110）。第三帝国下、アテナイの民主政の否定的な側面を批判し、スパルタの教育を条件付きで賛美したプラトンが大きな注目を浴びたのは、偶然ではない。これについては、佐々木毅『プラトンの呪縛』（講談社、2000年）を参照。

121）Butler, Elsie M.: Deutsche im Banne Griechenlands, aus dem Englischen übertragen von Viktor Kostka u. Karl-Heinz Hagen, Berlin 1948.

122）これは例えば、次のような問いの形で現れた。「文化の連続性は、文化財をある民族から他の民族へ転移すること、つまり国際交流、翻訳と受容から生まれるのか、それとも民族的な固有性への孤立主義的な固執から生まれるのか。別の言い方をすれば、異質なものを我がものとすること、それとも固有のものを守ることのどちらが優先されるべきなのか。」（See, Klaus von: Deutsche Germanen-Ideologie; vom Humanismus bis zur Gegenwart, Frankfurt am Main 1970, S.73.）

ように見える[123])。その結果が本論で明らかにしたような、第三帝国におけるスパルタ受容であった。「北方人種の神話」に基づいて神話化されたスパルタ[124] は、「20世紀の神話」たる第三帝国の母体となった[125] のである。第三帝国におけるスパルタ受容に対する批判は、「スパルタ主義の持つ積極的な価値」からのみ行われたのではない。その批判の多くはキリスト教的な隣人愛、啓蒙主義的な理性、人間性という、スパルタ主義が否定した、スパルタ主義の台頭以前にヨーロッパで支配的な価値の側から行われた。

クセノポンは、「万人がスパルタ人の生活習慣を称賛した。しかしいかなるポリスもこれを模倣しようとしなかった」[126] と前４世紀に記している。そういった中で、ドイツ第三帝国はスパルタを主として模倣した史上稀に見る国家となったのである。

謝辞：本論文は、平成29年度科学研究費助成金（基盤研究Ｃ、課題番号17K02265）による研究成果の一部として公表するものである。

123）例えばベルヴェは非ナチ化の審査に対する抗告書において、「歴史家の課題は、（非ナチ化委員会の）委員長が想定しているように見えるのとは異なり、人間性という理念や人類の改善に仕える点にあるわけではない」（バイエルン州立図書館、Nachlass von Helmut Berve, Ana 468.C.1.25, [Berufung gegen den Spruch der Spruchkammer Ⅹ vom 11.3.48 gegen Dr. Helmut Berve]S.7）と述べている。

124）Kirsten, Ernst: *Die Entstehung* des spartanischen Staates, in: Neue Jahrbücher für Wissenschaft und Jugendbildung, Bd.12, 1936, S.385f.. Vacano, O.W.v.: a.a.O., S.126.

125）その際ミュラーとニーチェ、この二人から影響を受けたベルヴェ（ミュラーからの影響についてはLosemann, Volker: Die Dorier im Deutschland der dreißiger und vierziger Jahre, in: Klio und die Nationalsozialisten, a.a.O., S.116ff., ニーチェからの影響についてはRebenich, S.: a.a.O., S.459-463を参照）の重要性を看過し得ない。彼らの仕事なしに第三帝国におけるスパルタ受容が可能であったか、疑わしい。

126）クセノポン『ラケダイモン人の国家』10, 8（Xenophon: Die Verfassung der Spartaner, übersetzt und erläutert von Stefan Rebenich, Darmstadt 1998, S.72f.）。